

2014/01/01

A年 主の命名日(元旦)礼拝

説教題：「救い主を抱きしめて」

説教者 伊藤節彦

讚美頌 8

民数記 6:22~27

Ⅱペトロ 1:1~11

ルカ 2:21~38

八日たって割礼の日を迎えたとき、幼子はイエスと名付けられた。これは、胎内に宿る前に天使から示された名である。

さて、モーセの律法に定められた彼らの清めの期間が過ぎたとき、両親はその子を主に献げるため、エルサレムに連れて行った。それは主の律法に、「初めて生まれる男子は皆、主のために聖別される」と書いてあるからである。また、主の律法に言われているとおりに、山鳩一つがいか、家鳩の雛二羽をいけにえとして献げるためであった。

そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた。シメオンが“霊”に導かれて神殿の境内に入って来たとき、両親は、幼子のために律法の規定どおりにいけにえを献げようとして、イエスを連れて来た。シメオンは幼子を腕に抱き、神をたたえて言った。

「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり／この僕を安らかに去らせてくださいます。

わたしはこの目であなたの救いを見たからです。

これは万民のために整えてくださった救いで、

異邦人を照らす啓示の光、／あなたの民イスラエルの誉れです。」

父と母は、幼子についてこのように言われたことに驚いていた。シメオンは彼らを祝福し、母親のマリアに言った。「御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。——あなた自身も剣で心を刺し貫かれます——多くの人の心にある思いがあらわにされるためです。」

私達の父なる神と主イエス・キリストから恵みと平安とが、
皆様お一人お一人の上にありますように。アーメン

【起】

正月を歌った一休さんの歌に、次の様なものがあります。

「門松は 冥土の旅の一里塚 めでたくもあり めでたくもなし」

一休さんは正月に、髑髏を叩きながら、「目出度い、目出度い」と言って、京都の町を歩いたと言われています。都の人はそれを見て、「まあ不吉な」と言って、一休さんを追い払ったそうです。ですから、門松をたて、正月だから目出度い、目出度い、と言って浮かれている人々に、一休さんは皮肉混じりにこのように語るのです。一つ歳を重ねるということは、一步、あの世へ、死へと近づいているのである、と。

一方、中世の修道院ではお互いに「メメント・モリ」、あなたの死を覚えよと挨拶しあいました。しかし、それは一休さんの語る「冥土の旅の一里塚」であるからではありません。私たちキリスト者は「メメント・ドミニ」即ち、あなたの主を覚えよ、という恵みの中に生かされているからこそ、死をも恐れることなく、私達は「その日、その時」を、信頼をもって迎えることが出来るのであります。

先ほどお読みしたシメオンとアンナは、その意味で「この目で救いを見た」と告白することが出来た幸いな人であり、クリスマスの訪れを味わい知った私たちの姿に他なりません。元日である今日、特にこのシメオンの賛歌「ヌンク・ディミティス」を通して、み言葉を皆様とご一緒に聞いて参りたいと思うのです。

【承】

21 節には「八日経って割礼の日を迎えたとき、幼子はイエスと名付けられた」とあります。主の御降誕から八日目は丁度、一月一日、教会暦では今日が主の命名日と呼ばれているのはそのためです。そして22 節では「律法の清めの期間が過ぎたとき、ヨセフとマリアはイエスを主に献げるために、エルサレム即ち神殿へ連れて行った」とあります。

律法には男子を出産した婦人は、合計四十日の間清めの期間が必要だと記されています。その期間が明けたとき、ヨセフとマリアは幼子イエスを伴い、エルサレム神殿へ詣でました。なぜなら、長子を聖別して神に献げる「初子の贖い」のためです。出エジプト記13 章やレビ記12 章にこの規定がありますが、これは出エジプトを記念して、「罪の故に神に打たれて死ぬべき者」の命を贖うという意味があります。「割礼」も、「初子の贖い」も、そしてこの後、幼子イエスが成人されてから受けられた「洗礼」も、全て「罪と死」への代償であり、「贖われて神のものとして生かされる命」に関わることでした。

ですから、本来、主イエスご自身はお受けにならなくてよい儀式、お払いになる必要のない贖いの代価です。しかしルカは、その服する必要の無い罪人の掟に服して、正に罪人の一人となって下さったことへと、私たちの目を向けようとしているのです。この、全き人となられた主イエスは、私ども「肉なる者」すべての罪を、まだおむつを当てている時

から、引き受けて下さったのです。

話を戻しますが、ですから、クリスマスから四十日後の二月二日が教会暦では主イエスの宮詣での日とされているのです。しかし、教会の歴史の中ではシメオンが幼子イエスに出会った出来事を年末に取り上げることが多かったのです。

皆様にとって昨年はどうのようだったのでしょうか。また、これまでの人生を振り返ってみてどのような感慨を持たれるのでしょうか。シメオンはまさに激動の時代を生きてきた人でした。彼の少年時代、80年間続いたユダヤ人の政治的な独立は失われました。その後、イドマヤ人のヘロデがローマの軍隊の力を借りてエルサレムを征服し、ユダヤ人の議員45名を処刑して実権を掌握しました。残忍さにおいて悪名高きヘロデ大王です。一方、ガリラヤを中心に過激派である熱心党が組織され、武力によってローマからの独立を勝ち取ろうとする運動が広がっていきました。シメオンの青年期から壮年期にかけては、そんな時代でした。そして、今日読みました出来事と前後して、同じ時期に熱心党を中心とした暴動が起こったことが知られています。エルサレムを中心として騒動が絶えることがなかったということです。そのような時代の波に翻弄され、費やされてきたのが彼の人生でありました。しかし、そのような一生の最後に至って、彼は主なる神に向かってこう語るのです。

「今わたしは、主の救いを見ました。

主よあなたはみことばの通り、しもべを安らかに去らせて下さいます。

この救いは、もろもろの民のために、お備えになられたもの

異邦人の心をひらく光、み民イスラエルの栄光です。」

「安らかに去らせて下さいます」という言葉があるように、確かにこの賛歌は、何かが終わる時に謳われるのが相応しい一面があります。修道院では一日の終わりである晩禱で謳われていましたし、宗教改革以降は礼拝の終わりで謳われるようにもなりました。そして何よりも、葬儀の中で謳われる時、そこには豊かに与えられた人生の恵みに対する大いなる感謝と賛美が溢れて参ります。

私が神学生の時に、ある兄弟の葬儀の司式補佐をさせて頂きましたが、その終盤、シメオンの賛歌「ヌンク・ディミティス」を謳っていると、聖壇上の棺の上に一条の光が差し込んできたのです。その光景は、まさしく信仰を与えられ、信仰に生き、御許に召されていった兄弟への救いのしるしであったと思います。

【転】

一日であれ、一年であれ、そして一生であれ、その終わりを「主の救いを見た」と感謝出来る歩みは幸いであります。このシメオンとアンナは救い主を待つことが出来た人達でありました。何か大切なものを待つこと、特に神を待つことは容易ではありません。むしろ、最も難しいことだとも言えます。そのために深い知恵を得ること。そして、その長く

暗い、先が見えない時間に耐えることが出来る人はそう多くはないでしょう。だから私たちは神を待つことから、他の目に見えるもの、確かだと思えるものへと置き換えようとする誘惑にあうのです。また、神を待つことを、ただ受け身であることにすり替えようとするのです。そして心の中でこう言うのです。「わたしは神を待っています。だから、神が来るまでは何もしようすることはありません。政治に関して私が出来ることはありません。何が正義かを判断することが出来ないからです。きっと神が平和をもたらして下さるでしょう。また、貧しい人々はいつの時代もいるのであって、一人のキリスト者の力はなんの役にも立たないでしょう。」そう言って、神を待つことを、ただ受け身であることへとすり替えてしまうのです。そうして、来ることのない神を待つことに飽き、疲れ、視線を下げて、もっと確実に心を満たしてくれる小さな神々、偶像や貪欲へと思いを傾けていくのではないのでしょうか。

しかし神を待つことは、観客席に座って舞台が始まるのをぼんやりと眺めることではありません。そうではなく、役者の一人となって、また舞台の大道具小道具として神さまの救いのドラマに用いて頂く備えをすることです。

シメオンもそしてこの後に出てくる女預言者アンナも老人でありました。この二人にとって神を待ち望むことは受け身で待っていることではありませんでした。シメオンは神への献身に生き、正しいことを行っていました。アンナは礼拝を絶やすことなく、夜も昼も神に仕え、神殿に灯りを灯し続けました。彼らは待っていました。祈りをもって、希望を絶やさず、自分達がなしうることをなしながら待っていたのです。それではなぜ、この二人が待つことが出来たのでしょうか？老人となって他にすることがなかったからでしょうか？

信仰とは暇があるからするものではない、祈りは他にすることがないからすることではありません。キリストに生かされている者、教会に生きる者皆に与えられている恵みであり務めであります。いや希望に他ならないのです。だからこそむしろ、時間的にゆとりのある老年期を、豊かな祈りの日々となすためには、多忙で壮んな時期にこそ、祈りの習慣を身につけておくべきなのです。老いる前に神さまとの交わりの喜びや慰め力を体験し、日々の生活を支える土台とする大切さを思うのです。コヘレト(12:1)が「青春の日々にこそ、お前の創造主に心を留めよ。苦しみの日々が来ないうちに。『年を重ねることに喜びはない』と／言う年齢にならないうちに」と語る通りです。信仰者は祈りつつ生きる。言い換えれば、信仰者は祈りつつ老いていくことが出来る。そして祈りは老いによって衰えることはないのです。

【結】

論語に「朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり」というのがあります。意味は、朝に人がどう生きるべきかを悟ることができれば、夕方に死んだとしても後悔はないということだと解説されます。シメオンも同じ思いでヌンク・ディミティスを謳ったのでしょうか？

シメオンはただ単に、自分の目的を達し、現在の幸福に満足して、自分の人生もう何もやることはない、後は死ぬばかりだ、と言っているのでしょうか。そうではありません。むしろ、彼の目はひたすら自分の前方を見つめています。つまり、その眼差しは幼子の将来に向かって、注がれているのです。この讃歌の後半に、そのことが謳われています。

「これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです」。

主イエスの救いは、万民の救いです。私やあなたの救いであるだけでなく、イスラエルや教会という枠を越えた、全人類の救いです。シメオンは、「万民のための救い主」としての幼子の将来に、じっと目を注いでいるのです。彼はそのようにして、望みに満ちた老年を過ごす信仰者としてのあり方を、私どもに示しています。

シメオンとアンナの姿には、クリスマスを経験したキリスト者の生きる三つの姿が示されています。まず「神の約束を待ち望む」姿です。第二に「聖霊に導かれて救い主に会う」姿です。そして最後に「主イエスに出会ったことを喜び、賛美し、その出来事を周りの人々に語り伝える」姿です。この三つの姿の中に、クリスマスの喜びを味わった者の生き方が表現されていないでしょうか。

ルーテル教会では毎週の礼拝の終盤、派遣の部でシメオンの賛歌「ヌンク・ディミティス」を謳います。それは終わりの謳としてではなく、礼拝の場からそれぞれの生活の場へと派遣されて行くための謳としてです。

ルターは「聖書はキリストが眠る飼い葉桶である」と語りましたが、礼拝の中で語られるみ言葉と聖礼典によって「救い」を見、幼子キリストを胸に抱くような喜びを私たちは味わうのです。この喜びの内に、私たちはキリストによって召し出された場所へと再び遣わされていくのです。教会に集められ、またそこから派遣される、この心臓の血液のような循環が、教会の、そしてキリスト者の生き生きとした姿です。救いを「今、ここで、既に」味わうことが許されているからこそ「今こそ去ります」、あなたの救いの中に安心して私は歩きますと確信をもって謳うことが出来るのです。

勿論、この賛歌は一義的には「この世を去る」ということが意味されています。ですから、その意味に於いては、この礼拝がこの地上での最後の礼拝かも知れないという思いを新たにしてくれます。私たちは礼拝をそのように毎回毎回当たり前のこととしてではなく、終末的な出来事として感謝をもって捉えていくのです。

繰り返しますが、私たちは礼拝で自分だけが救いに与り、心満たされ、温かな交わりを楽しむためにだけ召されたのではない。むしろその喜びと感謝の気持ちを、まだその喜びを知らない隣人へと語り伝える働きへと押し出されていくのです。シメオンは幼子を抱き、「万民のために備えてくださった救い」と語りました。ヌンク・ディミティスを謳いながら、私たちは今も尚、語り伝えていくべき喜びがあることを繰り返し心に刻んでいくのです。この福音に生かされて、新しい一年を歩んで参りましょう。

人知ではどうてい測り知る事の出来ない神の平安が、あなたがたの心と思いを、キリスト・イエスにあって守るように。アーメン

以上本文 4,810字